

かささぎ 通信 第127号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2023年 7月 14日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二三年六月の「森三郎の作品を読む会」では「うぐいすの謡」
『うぐいすの謡』[1943.8 拓南社] 表題作) を読みました。

「うぐいすの謡(うた)」はこんな話です。

主人公・旅の若者は月のいい晩に、不思議な力に誘い込まれるように森に入り込みました。奥には大きな罌粟(けし)の花園があり、その美しい花の一つに顔を寄せ匂いをかいだとたん、若者は気を失ってしまいます。気がつくとき若者は美しい少女の膝を枕に眠っていたのです。実はそこは恐ろしい魔女の住む森で、少女はその娘でした。少女の話によれば花園の花の匂いをかいだ人は皆、死んで蝶々になってしまうのです。しかし月の美しいその晩は魔女が遊びに出かけていたので、若者は難を逃れたのでした。

澄んだ瞳とうぐいすよりも美しい声のその少女に、若者は心を奪われ、妻になつてほしいと頼みます。しかし少女は、自分も人間の世界を慕っているけれど、魔女の娘の自分は人間の妻にはなれないと答えます。

その時ちょうど母親の魔女が帰ってきて、若者を小さな緑色のうぐいすに変え、一本の罌粟の茎にしばりつけました。その後、魔女が眠つてしまうと少女はそつと、うぐいすの両方の眼に自分の唇をあてました。同時にうぐいすの姿はなくなつて、若者が元の姿で立っていました。若者は少女が魔女の呪いを解いてくれたことを知りましたが、代わりに少女は二つの目を失ってしまったのです。早く逃げるように促す少女に向かって、若者は一緒に逃げようと言います。少女は、若者の力で自分を人間の女にしてくれるならそれが叶うと教えてくれます。

どこか遠くの「ささらの小野」という野原にある一本の大きな榎の下の泉には、白玉のような尊い命の水が噴き出ているから、それを飲ませてくれればすべての魔法が解けるのだと少女は言います。その榎には一羽のうぐいすがこんな歌を歌っているのだと、少女は歌ってみせます。

天(あめ)なるや ささらの小野の 榎葉井(えのはい)に
白玉しづくや 真玉(またま)しづくや

若者はその水を探して帰ってくることを誓いますが、森を出たとたん、それまでの少女とのやり取りが本当のことだとは思えなくなり「あの娘はおれをだましたのじゃないかしら」と思います。すると若者は再びうぐいすに姿が変わり、傍らには水晶のような二つの目を開いた少女が立っていました。若者のうぐいすはあの「天なるや・・」の歌を歌いながら飛び立っていきました。

若者が懐疑心を抱いた場面での少女の言葉が、この話の眼目ではないでしょうか。少女は「人間は疑いといういやしいものを心にもつことを、私は初めてしました」「もう人間の女になろうとは思いません」と言い放ち、人間の世界を慕う気持ちを捨て去りました。

タイトルの意味はうぐいすが歌う「天なるや・・」の歌を指していることが分かりました。森三郎自身はこの作品に付いて『あとがき』の中で「少々バタクさいものですが創作」と書いています。しかし歌の表現は日本の古典の中から採っていると思われれます。「天なるや ささらの小野の」は『万葉集』巻二(50)や巻十六(388)にも出てくる表現で、不思議な水が天上の世界のどこかにあることを示唆しているのでしょうか。

「榎葉井」は『日本国語大辞典』には催馬楽「葛城(かつらぎ)」の例文がみえます。「葛城の寺の前なるや 豊浦の寺の西なるや 榎の葉井に白壁(しらたま) 沉(しづ)くや 真白壁(ましろ) 沉(しづ)くや」といい榎の葉の井戸に白壁が沈んでいるのが見えると歌っています。この催馬楽は『続日本紀』(光仁天皇前紀)や『源氏物語』の「若紫」にも出てきます。三郎はこれらの表現をつないで、榎葉井にある水が縁起の良い命の水であることを暗示した歌を作ったのでしょうか。三郎が古典にヒントを得て創作をしていたことはこれまでも見てきましたが、こんな歌の中にもその方法を見ることができました。

次回予定 (八月は休会です)

二〇二三年九月八日(金) 午後一時半~三時半

・雪(ゆき)んこんお寺の柿の木

『雪(ゆき)んこんお寺の柿の木』[1943.12] 表題作)

・だ(た)ん子(こ) 『赤(あか)い鳥(とり)』1933.3)